

江戸川乱歩研究

——浅草の明け暮れ——

大川 和 恵

はじめに

江戸川乱歩の作品には、実在する土地や建物が度々登場する。このような現実的世界の中に非現実的な事件が起るというギャップは、乱歩作品の魅力の一つだと言えよう。多くの土地を舞台に物語を紡いだ乱歩だが、中でも頻繁に登場するのが浅草である。自身の随筆「浅草趣味」^{注1}で、「僕に取って、東京の魅力は銀座よりも浅草にある。浅草故の東京住いといってもいいかも知れない」と語っていることから、乱歩の浅草愛ははつきりと見てとれる。それ故に研究対象としても重きが置かれてきた浅草だが、本論では、これまでの研究においてあまり考慮されてこなかった「時間」に着目したい。そこで、作品中における昼や夕暮れ、夜といった時間帯に応じて舞台となる浅草も姿を変えるのではないか、という疑問を発端とし、本論では乱歩の描く浅草が時間によってどの

ように変化していくのかを明らかにする。

本論の前提ともなる乱歩と浅草の関係については、彼自身の随筆だけでなく、数多くの記事や論にもまとめられている。例えば、高橋康雄は「描かれた街角 浅草 乱歩作品を培養する異次元空間」^{注2}で、浅草自身が「混沌の作品そのもの」^{注2}とした上で、「乱歩の作品を徐々に培養する恰好の異次元空間であつた」と語っている。信時哲郎は「乱歩の浅草／浅草の乱歩——押絵と旅する男」^{注3}の中で、「かくも浅草趣味にあふれた本作こそ、（中略）最も乱歩的な〈探偵小説〉だったと言ふことができるのではないだろうか」と述べる。このように、浅草を舞台とすることによって、乱歩の作品はより輝きを増すのだ。

乱歩がどの程度、浅草を作品に使用していたのかは、筆者の作成した表をもとに明らかにする。次の表は、平山雄一の『江戸川乱歩小説キーワード辞典』^{注4}に登場する浅草の全地名、固有名詞を

年	作品数	作品名
1925	2	<ul style="list-style-type: none"> ・「百面相役者」(「写真報知」7月16日、26日連載) ・「屋根裏の散歩者」(「新青年」18月)
1926	5	<ul style="list-style-type: none"> ・「闇に蠢く」(「苦楽」1月～11月連載し中絶、『江戸川乱歩全集』1927年結末書下ろし) ・「空気男」(「写真報知」1月5日～2月15日「二人の探偵小説家」と題して連載し中絶、『江戸川乱歩全集』1931年「空気男」に改題) ・「エゾグラム」(「新小説」16月) ・「木馬」は通る(「探偵趣味」10月) ・「一寸法師」(「東京朝日新聞」12月8日～1927年2月20日連載)
1927	0	<ul style="list-style-type: none"> ・「空中紳士」(「新青年」12月～9月「飛機睥睨」と題して連載、『空中紳士』1929年「空中紳士」に改題)
1928	2	<ul style="list-style-type: none"> ・「陸戦」(「新青年」18月～10月連載) ・「押絵と旅する男」(「新青年」16月)
1929	3	<ul style="list-style-type: none"> ・「虫」(「改造」19月～10月連載) ・「蜘蛛男」(「講談倶楽部」18月～1930年6月連載) ・「探奇の果」(「文芸倶楽部」11月～12月連載) ・「吸血鬼」(「報知新聞」19月30日～1931年3月12日連載)
1930	2	<ul style="list-style-type: none"> ・「吸血鬼」(「報知新聞」19月30日～1931年3月12日連載) ・「盲獣」(「朝日」12月～1932年3月連載) ・「目撃博士の不思議な犯罪」(「文芸倶楽部」14月) ・「地獄風景」(「探偵趣味」5月～1932年3月中途まで連載、『江戸川乱歩全集』1932年「メリー・ゴー・ラウンド」以降の章を書下ろし)
1931	3	<ul style="list-style-type: none"> ・「殺人迷路」(「探偵クラブ」10月) ・「悪霊」(「新青年」11月～1934年1月連載し中絶) ・「人間豹」(「講談倶楽部」11月～1935年5月連載)
1932	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「殺人迷路」(「探偵クラブ」10月)
1933	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「悪霊」(「新青年」11月～1934年1月連載し中絶)
1934	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「人間豹」(「講談倶楽部」11月～1935年5月連載)
1935	0	
1936	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「大暗室」(「キング」12月～1938年6月連載)
1937	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「少年探偵団」(「少年倶楽部」11月～12月連載)
1938	0	
1939	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「幽鬼の塔」(「日の出」4月～1940年3月連載)
1940	0	
1941	0	
1942	0	
1943	0	
1944	0	
1945	0	
1946	0	
1947	0	
1948	0	
1949	0	
1950	0	
1951	0	
1952	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「怪奇四十面相」(「少年」11月～12月連載)
1953	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「鵺形の天女」(「宝石」10月～1954年1月連載)
1954	2	<ul style="list-style-type: none"> ・「女妖」(「探偵美話」11月) ・「化人幻戯」(「知叢」宝石「11月第一回発表、「宝石」1930年1月～10月第二回以降連載)
1955	3	<ul style="list-style-type: none"> ・「影男」(「面白倶楽部」11月～12月連載) ・「防空壕」(「文芸」17月) ・「十字路」(「書下し長篇探偵小説全集」10月) ・「魔法博士」(「少年」11月～12月連載)
1956	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「魔法博士」(「少年」11月～12月連載)

抽出し、そこに用例として書かれている作品をすべてまとめたものである。抽出した地名や固有名詞はいずれも現実に存在するもの、あるいは存在したものののみを採用した。

表からは浅草の登場頻度に関して、一九二五年から一九三一年にかけて特に増加し、一九三二年以降は減少傾向に、そして一九五二年から一九五六年にかけて再び増加していることが読み取れた。浅草は大きく二度にわたり登場頻度の増加が見られたが、使用頻度を割合で比較すると、一九二五年からの七年间は一年平均約二・四冊に浅草が登場する一方、一九五二年からの五年间は一年平均一・六冊となっている。このことから、乱歩が特に浅草を多用していたのは一九二五年から一九三一年であったことが明らかになった。

この結果から、本論で扱う作品は一九二五年から一九三一年まで、かつ浅草が舞台となっている「屋根裏の散歩者」^{注5}「闇に蠢く」^{注6}「空気男」^{注7}「一寸法師」^{注8}「モノグラム」^{注9}「木馬は廻る」^{注10}「陰獣」^{注11}「押絵と旅する男」^{注12}「虫」^{注13}「猟奇の果」^{注14}「盲獣」^{注15}の一一作品に限定する。これらの作品において、浅草はどのように描かれているのか。昼・夕暮れ・夜の三つの時間帯にわけて考察し、それぞれの特徴についてまとめていく。

なお、乱歩作品の本文引用は光文社『江戸川乱歩全集』全三〇

巻（二〇〇三年～二〇〇六年）に拠る。また、本論中や作品中、引用中には、現在考慮すべき表現や用語もいくつか含まれているが、当時の時代背景を正確に反映するために、今回はそれらの表現や用語をそのまま使用している。

第一章 浅草の屋

第一節 探偵・犯罪者への変容

探偵と犯罪者は、乱歩作品に欠かすことのできない存在である。彼らは、いかにして探偵や犯罪者になるのか。この第一節では、登場人物たちが、浅草での経験を契機に探偵や犯罪者に変容していくことを論じる。まずは「闇に蠢く」^{注6}を通じて、探偵への変容について見ていく。次の引用は、この作品の探偵役である植村喜八が、一度面識があった前科者の男を尾行する場面だ。

「気づいたかな」

喜八はハツとして、思わず逃げ腰になったが、男は一向無表情にぼんやり佇んだままだ。どうやら彼を見覚えていない様子である。この分なら大丈夫だ。どこまでも尾行してやろう。喜八はホッとして、なおも男の挙動をうちまもった。

尾行を続けた結果、男が友人野崎の遭遇した殺人事件に大きく関係していることを知った植村は、自身もその事件に巻き込まれることになる。この引用で注目したいのは、男が植村のことを覚えていなかったことだ。高橋雄豺は「帝都の警備」^{注16}において、都市のもつ特徴をこう述べる。

都会が大きくなればなる程、住民の移動が多くなつて近隣者相互の間の親密の度合は薄くなり、表面だけの交際はあるが内実は分らぬ人同志の生活となつて、所謂世を忍ぶに都合がよく、一面一寸した仕事を見出すの便宜も多いので自然犯罪者等の流入して来るものが多くなることを免れない。

このように、浅草という都市の人間関係の希薄さが植村の尾行を成功に導いたのだ。さらに浅草の犯罪性が高いことも、尾行成功の一因となっている。東京市編の『東京市統計年表 第24回』^{注17}における「犯罪件数」の統計表によると、「闇に蠢く」が発表された一九二六年の浅草の犯罪件数は計七〇五〇件で、一六ある区署の中で一番多い件数となっている。このデータから、当時の浅草は東京の中でも特に、犯罪が多発していた場所だったことがわかる。浅草における人間関係の希薄さによって植村の尾行は成立し、

犯罪性の高さによって彼は探偵となり得たのだ。

次は、犯罪者への変容について「屋根裏の散歩者」^{注5}と「空気男」^{注7}の二作品を通じて述べる。「屋根裏の散歩者」には、「犯罪嗜好者に取つては、こよなき舞台」である浅草公園で「犯罪の真似事」を行う、郷田三郎が登場する。次の引用は、実際に郷田がとった行動だ。

犯罪者が同類と通信する為でもあるかの様に、白墨でその辺の壁に矢の印を書いて廻ったり、金持らしい通行人を見かけると、自分が掏摸にでもなつた気で、どこまでもどこまでもそのあとを尾行して見たり、妙な暗号文を書いた紙切れを—それにはいつも恐ろしい殺人に関する事柄などを認めてあるのです—公園のベンチの板の間へ挟んで置いて、樹蔭に隠れて、誰かがそれを発見するのを待構えていたり、其外これに類した様々の遊戯を行つては、独り楽しむのでした。

この犯罪の真似事は、犯罪を行う時のようなスリルを味わいつつも、罪に問われることのない行為ばかりであった。だからこそ、郷田は白昼堂々人の多い浅草公園で、それらを行うことができたのだ。このような行為で自身の欲望を満たしていた郷田だが、次

第に犯罪の真似事に飽きてしまい、遂には殺人事件を起こして犯罪者となってしまう。

郷田と同様に、浅草公園での経験が犯罪者への道につながったのが、「空気男」に登場する北村五郎と柴野金十である。彼らは、変装した片方の人間をもう片方の人間が探す「探偵ごっこ」というゲームを、浅草のキネマクラブで行っていた。そしてこの「探偵ごっこ」を通じ、彼らは次第に自分たちが本当に犯罪者や刑事になったような気持ちを抱くようになり、「自分達が既に犯罪の真似事では満足出来なくなったことを感じ」るのだ。

彼らの行く末は、作品が中絶してしまったため断定はできない。しかし作中に「ついには恐ろしい犯罪をさへ行うに至った、そのいきさつを書記するのが、実はこの物語りの目的」と書かれていることから、彼らがいずれ犯罪者となっていたであろうことが読み取れる。彼らが犯罪者となるならば、そのきっかけは浅草キネマクラブでの「探偵ごっこ」に他ならないだろう。

このように浅草公園が舞台となることで、登場人物たちは犯罪者へと変化した。ゴッフマンは『ゴッフマンの社会学^{注18} 4 集まりの構造―新しい日常行動論を求めて』にて、公園という場所の持つ特性を次のように述べる。

一般的に、公園のような場所は、強盗、ゴミの不法投棄、売春の客引、（酔っぱらい、浮浪者、入院していない精神病者の徘徊）の現場になったりするが、（中略）それは、非常に規則のゆるやかな行動環境に慣れた人びとの関与構造が、上記のような好ましくない行為のもっている不適切さの度合いをかなり減じてしまうからであると理解すべきである。公園は、これらの行為の許容度を最大にし、そのような行為をしている現場をおさえられた時に支払う代価を最小にするような場所といえよう。

浅草公園に集う人々はお互いを知らず、またお互いを知る必要もない。この関心の薄さから、犯罪は姿を隠すのだ。「屋根裏の散歩者」の郷田や、「空気男」の柴野、北村は、たとえ罪を犯しても特定されにくい環境だからこそ、犯罪の真似事をする事ができた。そしてその経験から犯罪の面白みを知った彼らは、犯罪者となっていくのだ。

このようにして、登場人物たちは浅草で探偵や犯罪者へと変容した。人間関係の希薄さや犯罪性の高さ、公園の特性といった浅草独自の環境が、彼らをそうさせたのである。

第二節 見知らぬ人々との出会い

浅草公園にあるベンチは、見知らぬ人々と交流する場として作中に登場する。特に一九二六年に発表された「モノグラム」^{注9}は、まさにベンチが舞台となった物語だ。この作品が発表された一九二〇年代後半、浅草公園のベンチは公園に住み着いていた浮浪者たちに使われていた。石角春之助は『浅草裏譚』^{注9}で、浮浪者たちにとって「公園のベンチが、家屋であり、寝室であり、食堂であり、応接間であり、書斎であり、更らに茶の間と言った処」だと語る。また、当時浅草にどれくらい浮浪者がいたのかは、「東京朝日新聞」の記事「見逃しならぬ野宿者調べ 失業問題が生み出す深刻極まる現実の証左」^{注20}に記載がある。

市社会局調査課では昨年、末浅草、上野公園、四谷鮫ヶ橋、深川富側町の四ヶ所で浮浪人四百七十三名の身許、年齢別に事情を調査したが、その調査によると（中略）失業した結果就職の機会なく自由労働者の群に入つてゐるうちに遂に野宿者となつたものは百五人といふ多数で、失業問題はこの方面からも慎重に研究すべき性質のものである

このことから、当時の浅草公園のベンチは失業者や浮浪者の集

まる場となつていたことがわかる。作中で彼らは「気の抜けた様な連中」や「落伍者」と呼ばれていた。つまり社会から落伍してしまつた人間を引き寄せ、受け入れるのが、当時の浅草公園ベンチのもつ特徴なのだ。この特徴を裏付けるように、物語の主人公たる二人の男もまた、「落伍者」であつた。失業中の栗原一造は、時間をつぶすために出かけた浅草公園で、同じく失業中の田中三良と一緒にベンチに座ることとなる。二人は初対面であるにも関わらず、互いにどこかで会つたことがあるように感じ、それがいつどこでのことなのかを話すうち意気投合するのだ。栗原は、田中と話すことになつた理由を次のように語っている。

これが外の時だったら、それ以上話を進めないで別れて了つたことでしょうが、今云う失業時代で、退屈で困つていた際ですし、（中略）まあひまつぶしといった塩梅で、変てこな会話を続けて行きました。

仕事はないが時間はある、そんな彼らの状況がこの会話を成立させたのだ。そして会話を続けるうち、彼らは好意を感じ合い、「お互の住所を知らせ、ちとお遊びにと云い交す程の間柄」にまでなる。彼らは最終的に、ベンチという空間を超えて関係を結ぶま

でに至ったのだ。

また「盲獣^{注15}」という作品にも、一場面だが、浅草公園のベンチが登場する。公園内で起きた事件について「職人風の男」と「盲人」が会話をしている場面だ。その中で、「職人風の男」は初対面の「盲人」に対して、「美しい女の足首だったと云うことですぜ」や「切りきざんだのかも知れないね」などと、くだけた話し方をしている。この会話の様子からは、二人の関係の気軽さを読み取ることができるよう。

ベンチに座る人々は、基本的に赤の他人だ。しかし、誰だかわからないということは即ち、その関係がその場限りのものであるということを示している。そのため、「モノグラム」や「盲獣」で描かれるように、人々はベンチで語り合うことができるのだ。またその中には、栗原や田中のように、その場限りの関係からその場を離れても続いていく関係に発展することもあった。つまりベンチには、人と人を引き合わせるだけでなく、そこに座る人々の関係を構築する力もあつたのだ。その証拠として、『東京朝日新聞』の記事「ベンチで結ばれた四人組の強盗団 最近市の内外を荒し回った兇賊の一味捕わる^{注16}」を引用する。

取調べに着手した結果右四名の者は他三名の者と職にはぐれ

浅草、今戸両公園のベンチで思案にくれてゐる内顔なじみとなり去る五月上旬からは浅草公園付近の木賃宿に同宿した上一団となつて窃盗を働き盗品は山分けすることを申合はせ

男たちはベンチで出会うことによって、良くも悪くも新たな人間関係を築いた。このように、ベンチが誰にとつても開かれた存在であつたこと、そして当時の浅草公園ベンチが時間を持て余した浮浪者や失業者たちのたまり場となつていたことから、そこは特に出会いの発生しやすい場になつていたとわかる。浅草公園のベンチには、人と人を引き合わせてつなぐ力があつたのだ。そして人同士が出会うからこそ、そこには物語が生まれる。浅草公園のベンチは、乱歩作品においては欠かすことのできない物語発生装置だったのである。

第三節 人工別世界の出現

浅草に集う多くの人々は、一体何を求めてその地に足を運ぶのか。石角春之助の著書『浅草経済学^{注22}』には、その理由が次のように語られている。

浅草を客観的、大衆の立場から観ると、言ふまでもなく、そ

れ等の消費経済場所である。(中略) だから商品経済の如く、金銭と商品との交換でなくして、金銭の消費に対し、常に消耗し得る処の娯楽乃至本能欲の満足に存するのである。

引用部から、人々の多くが娯楽によつて欲望を満足させるために浅草を訪れていたことがわかる。では人々の欲望を、浅草はどのように満たしてくれるのか。今節では「木馬は廻る」^{注10}と「押絵と旅する男」^{注12}の二作品を分析対象として考察していく。「木馬は廻る」に登場する格二郎は、「煩わしい家庭」を逃れ、毎日「木馬館の別天地」に出勤する。木馬館にはメリーゴーランドがあり、その回転に合わせてラッパを吹くのが格二郎の仕事だ。

お前が廻っている間は、貧乏のことも、古い女房のことも、鼻たれ小僧の泣き声も、南京米のお弁当のことも、梅干し一つのお菜のことも、一切がっさい忘れている。この世は楽しい木馬の世界だ。

格二郎は木馬館に出勤することで、家庭という現実を忘れることができた。また、同じ木馬館で働く娘お冬と接すると「青年の様に胸が躍」り、「幽かに甘い気持」を抱く。妻子持ちでありなが

ら、それを忘れて「青年の様」な気持ちになる格二郎は、家庭の彼とは違った姿を木馬館で見せる。つまり木馬館は、格二郎にとつて家庭とは隔絶された場であり、理想の自分になれる世界であったのだ。添田唾蟬坊は『浅草底流記』^{注23}にて、木馬館を訪れた大人を次のように描いている。

子供と一緒に乗る時は、足の裏からむずむずと、古びた若さの記憶が匍ひ上つてきて、いつの間にか、矢ッ張り子供になつて、はしゃぎ出すに違ひないのです。

このように実際の木馬館も、大人が現実を忘れて子どもに戻り、楽しむことができる場所であつた。しかし、格二郎が木馬館を理想の場として捉えるためには、必ずそれと対比することができ「家庭」が必要である。「煩わしい家庭」があるからこそ、格二郎は木馬館で楽しむことができたのだ。格二郎にとつての欲望は、家庭を忘れ楽しむこと。それを叶えてくれるのが、木馬館という別世界だったのである。

次に扱う「押絵と旅する男」において別世界となるのは、浅草にあつた十二階という建物だ。十二階とは、関東大震災で倒壊してしまつた塔の名前である。作品中では「東京中どこからでも、

その赤いお化が見られた」とあり、どこか得体のしれない雰囲気
の建物として描かれている。この十二階において注目したいのが、
そこに昇ることによって視覚が歪められることだ。細馬宏通は
『浅草十二階 塔の眺めと〈近代〉のまなざし』^{注24}で、十二階からの
眺めについてこう語る。

その高さゆえ、視野には中景から遠景のかんりの部分が収ま
る。このため、景色の遠さと大きさの感覚は狂い、さまざま
な事物は「集まり」「一望」できることになる。

この記述から、十二階に昇ることによって感覚は狂い、地上に
いる時とは異なる視覚を得ることができるとわかる。作中でも、
十二階に昇った男の視覚は、押絵を本物の人間の娘だと思い込む
ほど歪められてしまった。男は彼女ともう一度見えることを願い、
何度も十二階に通う。そして、十二階はその男の願いを叶えたの
だ。

この二作品に共通しているのは、木馬館や十二階が彼らにとつ
て別世界として存在していることである。家庭とは違う自分を生
きることができた格二郎、押絵の娘を人間の娘と見間違ひ恋をし
てしまった男。彼らは浅草にあった建物に入るにより、いつ

の間にか別世界へと歩みを進めてしまっていたのである。

助川徳是は「江戸川乱歩―「押絵と旅する男」を視座として」^{注25}
にて、浅草を「人工樂園」と表現している。当時の浅草には、木
馬館や十二階の他にも、パノラマ館や水族館といった、さまざま
なテーマの建物が乱立していた。人々はそれらの建物に入ること
で、自らの好む別世界に身を投じ、各々の欲望を満たしていたの
ではないか。

しかし、建物はあくまで人が訪れる昼間のみ開いているのであ
り、閉館してしまえば、人々はその別世界からの退場を余儀なく
される。建物から一步外へ出てしまえば、彼らの興奮は徐々に冷
め、散り散りに各家庭へ、すなわち現実へと帰っていくのだ。つ
まりこの人工物は、人々を一時的にしか別世界へ誘うことができ
ない、いわば不完全な存在なのである。昼の浅草、それは内に一
時的な人工別世界を出現させ、訪れる人々の欲望を満たしてくれ
る場として機能していたのだ。

第二章 浅草の夕暮れ

第一節 浅草の別世界性

第一章第三節で、昼の浅草が人工別世界を内包しているとい
うことについて述べた。しかし乱歩作品には、その人工別世界を出

たにもかかわらず、人間から眞の別世界の住人に変身してしまう男が登場する。それが「押絵と旅する男」^{注12}で、「私」と同じ汽車に乗り合わせた男の兄である。男の兄は、なぜ別世界の住人になることができたのか。今節では、その原因の一つとして、浅草そのものに別世界性があつたことを明らかにする。

吉見俊哉は『都市のドラマトゥルギー——東京・盛り場の社会史』^{注26}で、「江戸最大の盛り場であつた両国」における「聖域性と悪場所性と死は相互に不可分に結びつきながら「盛り場」という空間」を形成していたと指摘し、それを「〈異界〉と呼ぶことができるかもしれない」としている。そして、同様に盛り場であつた浅草を、次のようにまとめている。

ここで確認しておきたいのは、浅草は江戸時代、前章で両国について述べたのと同様、〈異界〉への窓という性格をもっていたことである。（中略）浅草は江戸のなかでもとりわけ行倒れや捨子の多い、「死」と密接な関係をもつた場所であつた。さらに浅草は、かつて穢多頭弾左衛門や非人頭車善七の居所であり、江戸最大の非人小屋の集中地帯であつたことを考えるなら、前述の〈異界〉への窓としての性格が、江戸の浅草を強く特徴づけていたことが理解されよう。

この記述から、江戸時代の浅草という土地自体が異界、つまり本論でいうところの別世界と関係の深い場所であつたことがわかる。また引用内の行き倒れや捨て子については、竹内誠『江戸の盛り場・考―浅草・両国の聖と俗』^{注27}にも記述があつた。

浅草寺境内で自殺者や行き倒れ人、このほか捨て子が多いのは、宗教的な救済空間だから、必ず親切に処置してくれるだろうという思いがあつたからであろう。（中略）浅草寺境内の聖地性が大いに発揮される事象であつた。

竹内はこの具体例として、天明七年の飢饉の際、浅草寺境内での自殺者、行き倒れ、捨て子の発生件数が二三件にものぼつたと述べている。このように浅草は、浅草寺という聖性を持ちつつ、正反対の死をも抱えた土地だったのだ。また斗鬼正一は「都市の境界的空間と文化の革新、創造―浅草の文化人類学的研究」^{注28}にて、浅草が地理的に「皇居、都心から物理的に隔たつて」おり、「文化によるコントロールの低い、いわゆる田舎との境界的空間」となっていると語っている。このように浅草は、江戸時代から、普段ふれることの少ない聖性や死、境界性をもつ土地として人々に認識されていたのではないか。だからこそ、浅草は人々にとつ

て別世界的な場所となつたのであろう。

第二節 真・別世界の出現

第一節にて、男の兄が押絵に変身した原因の一つが、浅草のもつ別世界性だと述べた。そこで今節では、さらに二つの要素が変身に関わっていることを論じる。その二つの要素を明らかにすべく、まずは男の兄が変身する場面を引用する。

日が暮て人顔もさだかに見えぬ、うすら淋しい観音堂の裏で、遠眼鏡をさかさにして、兄を覗くなんて、気違いじみてもいまずれば、薄気味悪くもありましたが、兄がたつて頼むものですから、仕方なく云われた通りにして覗いたのですよ。さかさに覗くのですから、二三間向うに立っている兄の姿が、二尺位に小さくなって、小さい丈けに、ハッキリと、闇の中に浮出して見えるのです。外の景色は何も映らないで、小さくなった兄の洋服丈けが、眼鏡の真中に、チンと立っているのです。それが、多分兄があとじきりに歩いて行つたのだでしょう。見る見る小さくなって、とうとう一尺位の、人形みたいな可愛らしい姿になってしまいました。そして、その姿が、ツーツと宙に浮いたかを見ると、アツと思う間に、闇の中へ

溶け込んでしまったのでございませう。

さて一つ目の要素とは「時間」、つまりこの変身が起きたのが日暮れであることだ。日暮れは、昼と夜の間の時間であり、人間の時間とそうでないものの時間の境界であると考えられる。だからこそ、男の兄は日暮れと共に押絵へと変化したのだ。例えば、物語の冒頭で「私」が男に遭遇したのも「夕方の六時頃」と語られていた。そこで「私」が男の「世にも不思議な物語」に引き込まれたのが、夕暮れという境界の時間であることは読者に印象づけられる。そう言った意味でも、夕暮れはこの物語において重要な役割を果たしているといえるだろう。

次に注目すべき二つ目の要素は「道具」、つまり男の兄が遠眼鏡によつて押絵に変化したことだ。遠眼鏡のもつ魔力については、先行研究で多く考察されており、例えば穴場文野は「覗く男、覗かれる女―江戸川乱歩『押絵と旅する男』」^{注29}にて、「兄は弟にのみ自らの願望を打ち明け、願望を叶えてくれる存在として、弟に重要な視覚装置である「遠眼鏡」を渡した」と述べる。また、片岡あいは「江戸川乱歩『押絵と旅する男』論―閉じ込められた隙間―」^{注30}で、遠眼鏡が「主体と客体の間にある距離」と「時間と言

う軸による距離」を消滅させるとしている。

以上のことから、「遠眼鏡」は希望を叶える、時間や距離を越境するといった、人知の及ばない特別な能力を持った装置として描かれていることがうかがえるが、さらに遠眼鏡には十二階という別世界を地上に出現させる力もあつたのではないか。その根拠は、遠眼鏡の見え方だ。男の兄は、十二階の上から下を覗いたとき、押絵に描かれた「一尺位の丈の」娘の顔をしっかりと見ることができた。一方男も逆さの遠眼鏡で、兄を「一尺位の、人形みたいな可愛らしい姿」で見ている。このことから、押絵に描かれた娘と男の兄は、ほとんど同じサイズに見えていたことがわかる。すると、男が兄を遠眼鏡で見たときの視線は、兄が押絵の娘を十二階の上から遠眼鏡で覗いた視線と重なるのではないか。つまり、男は遠眼鏡を逆さに覗くことによって、十二階が内包していた別世界をその場に出現させてしまったのである。

十二階は第一章第三節でふれた通り、入った者の視覚を歪ませる建物であった。そのため、男と彼の兄は十二階を出ることによって、その別世界からは解放されたはずである。しかし、遠眼鏡という十二階からの視線を再現することができる装置によって、二人は地上にいなが再び十二階の内部に囚われてしまったのだ。かつて十二階上で男の兄が押絵を人間として見たように、今度は男が兄を人形のように見た。そうすることで、二人を包む空間は

再び十二階内の別世界と同じになり、視覚の歪みが起きたのだ。こうして、男の兄は真に別世界の住人となったのである。

ここまでの分析と第二章第一節をふまえ、真の別世界が浅草に出現するためには、大きく三つの条件が必要だと考えられる。一つ目は、土地そのものに別世界性があること。二つ目は、時間帯が夕暮れであること。そして三つ目は、別世界を内包する建物と同じ視点を持つことができる道具を使用することである。「押絵と旅する男」では、男がその条件を偶然にも満たしたことによって真の別世界が出現し、男の兄は押絵に変身してしまったのだ。

第三章 浅草の夜

第一節 さまよう犯罪者との出会い

第一章第二節で、昼の浅草では見知らぬ人との出会いがあると論じた。しかし、夜はまた昼とは違い、同じ見知らぬ人でも犯罪者との出会いが多く描かれている。そこで今節では、取り上げる作品の登場人物がどのような犯罪者と出会うかをまとめ、さらに犯罪者が浅草に集う理由を考察する。

乱歩作品には、「闇に蠢く」^{注6}の前科者や「猟奇の果」^{注4}における犯罪のブローカーといった犯罪者が登場する。最初に、これらの犯罪者についてまとめると。「闇に蠢く」の植村喜八は踊子お蝶を追っ

てきた男を「しよつちゅうその辺をぶらついている刑事探偵」の真似をして追い払う。そしてお蝶から、男が前科者であったことを聞くのだった。この作品が連載を開始した一九二六年の「東京朝日新聞」には、「浅草公園内の浮浪者狩り 物すごい前科者 五百六十名を取調^{注31}ぶ」という記事がある。

浅草象潟署では千葉県八幡町の五人殺傷犯人が浅草公園浮浪者中にまぎれ込んでゐるだらうとの情報もあり、かたぐい三日午前一時から三時まで非番巡查総召集の下に同公園において臨時浮浪者の大検挙を行ひ五百六十名の浮浪者を取調べた（中略）前科一犯以上のもの二十一名その他不審者合計四十三名を検束し取敢ず拘留に処し取調べを行ふ事となつた

このことから、浅草には実際に多くの前科者がいたことがわかる。植村が前科者と出会つたのも、浅草が舞台だったからなのだろう。次の「猟奇の果」には「奇蹟のブローカー」を名乗る青年が登場する。青年は主人公の青木愛之助に、彼が犯した殺人を一万円で解決すると持ちかけた。犯罪を隠蔽するのに一万円。この金額は、週刊朝日編の『値段史年表 明治・大正・昭和^{注32}』によると、一九三一年の総理大臣の給料八〇〇円の約一二倍に相当し、

かなりの高額であるといえる。当時このようなブローカーがいたかどうか、現時点では資料不足のためわからないが、もしこれが乱歩の創作した職業であつたとしても、犯罪の多発していた浅草だからこそ生まれたものだといえよう。

以上の二作品は一例に過ぎず、他にも「木馬は廻^{注10}る」にはスリが登場するなど、浅草には様々な犯罪者がいたことが作品からうかがえる。では、浅草はなぜ犯罪者を惹きつけるのか。今度は「陰獣^{注11}」と「虫^{注13}」の二作品をもとに考察する。「陰獣」に登場する小説家大江春泥は、人嫌いにもかかわらず変装をして、夜中に浅草をぶらつくという噂があつた。主人公寒川の友人である本田は、彼がそのような行動をとる理由を次のように推測する。

あの男は極端な恥しがり屋じゃないでしょうか。（中略）文名が高まれば高まる程、あのみつともない肉体が、益々恥しくなつて来る。そこで友達も作らず訪問者にも逢わないで、そのうめ合せには夜などコッソリ雑沓の巷をさまよふのじゃないでしょうか。

また「虫」に登場する榎木愛造も、夜の浅草に頻繁に赴いていた。「虫」は作中に「このお話は大地震よりは余程以前のこと」と

あることから、震災前の時代が描かれた作品である。時代は違っても、柾木は大江と同様、夜の浅草公園の雑沓をさまよい歩くのだ。

極端な人厭いの彼が、盛り場を歩き廻ることを好んだというのは、甚だ奇妙だけれど、彼は多くの夜、河一つ隔てた浅草公園に足を向けたものである。(中略)人は、無関心な群衆のただ中で、最も完全に彼自身を忘れることが出来た。群衆こそ、彼にとってこよなき隠れ蓑であつた。

雑沓を行きかう人々は、よほど意識していなければ皆すぐに視界から消えてしまい、記憶にすら残らない。すると、雑沓が「隠れ蓑」であることは間違いないだろう。しかし、いくら「隠れ蓑」であつたとしても、人嫌いがなぜ人の多い雑沓へと足を向けるのか。

本田は、大江が雑沓をさまよう理由を、彼が自分の容姿に自信がないからだとしている。しかし、これは裏を返せば身体的特徴が目立たなければいいわけで、個が特定されることがそうそうない雑沓ならば、誰の視線も気にせず行動できる。また、「世に類もあらぬ厭人病者」である柾木は、「人間が懐しい癖に、彼自身の恥

ずべき性癖を恐れるが故に、人間を避けた」と作中で語られる。つまり、彼らは人と関わることを避けつつも、人と関わりたいと願う矛盾を抱えた人間なのだ。

彼らはそれぞれの理由から他人と相互的に向き合うことができない。しかし雑沓であれば、人々は彼らを気にしないため、一方的に他人と関わる事ができるのだ。この後、大江は脅迫状を書いた殺人犯として疑われ、柾木は自分の好きだった女性を殺してしまう。こういった犯罪は、一方的に他人と関わるための最後の手段だといえるかもしれない。

人を避けつつも本当は関わりたかつた彼らを、浅草は受け入れた。つまり夜の浅草は他人と関わりえずに、しかし他人の中に身を置くことができる特殊な空間となっていたのである。だからこそ、犯罪者は浅草へと足を運んだのだ。

第二節 性のゆらぎの増幅

乱歩作品における夜の浅草には、自身の性がゆらいでいる人と新たにゆらぎを発露させる人が登場する。そこで今節は、これらの人々を分析し、彼らと浅草の関係性について考察していく。なお「性のゆらぐ人」とは、生物学的性を基準とし、性自認が生物学的性と一致しない、また性的対象が異性でない人を指している

ものとする。

まず、性がゆらいでいる人について、「一寸法師」^{注8}と「屋根裏の散歩者」^{注5}の描写をもとに分析を進める。最初の作品「一寸法師」の冒頭は、夜の浅草公園で小林紋三が同性愛者たちを観察する場面から始まる。

彼等は、一寸その辺のベンチに腰をおろしたかと思うと、じきに立上って同じ道を幾度となく往復した。そして木立の間の暗い細道などで外の散歩者に出逢うと、意味ありげに相手の顔をのぞき込んで見たり、自分でもそれを持っている癖に、相手のマツチを借りて見たりした。彼等は極めて綺麗にひげをそって、つるつるした顔をしていた。縞の着物に角帯など締めているのが多かった。（中略）彼等の歩きつぶりなどから、あることを想像しなくてもなかったが、それにしては、皆三十四十の汚らしい年寄りなのが変だった。

ここでは、彼らのアプローチ法と容貌が小林の目を通して語られている。アプローチ法としては、顔をのぞき込む、マツチを借りるなど、回りくどく慎重な行為がうかがえた。三村徳蔵の「新東京陰間団」^{注33}にも、当時の同性愛者が「煙草の火を借りに来て二

と言三言、世間話をしてゐる中に、商売を始め出した」と書かれている。「一寸法師」では同性愛者たちの姿が、現実には即した形で描かれているのだ。

次に容貌については、ひげ、着物、年齢についての言及がされていた。ひげという男性的な要素を剃ることで、男性らしさは薄れるだろう。また吹野誠太の「大紺と模様紺と縞物に就て」^{注34}によると、縞の着物は「中年婦人向の需要が多く、（中略）表現の方法により清新な気分を出すことが出来る」ものであった。ここでは、中年男性が若々しく魅力的に見える服装として使用されたと思われる。

年齢については、三村徳蔵の「新東京陰間団」に、当時浅草にいた男娼たちの年齢は「二十四歳はまだ若い方だ。五十三歳つていふ、お爺さんのかげまもある」とあった。「一寸法師」に登場する同性愛者たちは、男娼であったかどうかは明記されていないが、彼らの描写は三村の書く男娼像に当てはまっている。

ここまで、小林の同性愛者への視線を考察したが、重要なのは小林が彼らに抱く「変だ」という違和感だ。小林は彼らに対し「どうかして正体をつきとめて見たい」と思っていた。つまり、小林は同性愛者について知識が乏しいため、「変だ」と感じたのではないか。三村徳蔵の「新東京陰間団」では、かげまに詳しくない

Bが「二十四歳つて、随分臺の立つたかげまだね」と発言している。しかし実際は、先述したように「お爺さんのかげま」もいたのだ。小林はそれを知らないため、彼らを見て「変だ」と感じたのではないだろうか。

この違和感は、同じく作中に登場する一寸法師や、彼の落とした人間の首と相まって徐々に増大していき、遂には小林を殺人事件へと導く。つまり、同性愛者たちに対する小林の視線は、殺人事件へと進む物語に違和感を添える、いわば物語の雰囲気をつくる役割を果たしているのだ。

また浅草には、女装する男も現れる。「屋根裏の散歩者」の郷田三郎は、浅草で行ういたずらの一つとして女装をしていた。

高価な鬘だとか、女の古着だとかを買ひ集め、長い時間かかって好みの女姿になりますと、(中略)或時は淋しい公園をぶらついて見たり、或時はもうはねる時分の活動小屋へ這入って、態と男子席の方へまぎれ込んで見たり、はては、きわどい悪戯までやつて見るのです。

さらに郷田は「服装による一種の錯覚から(中略)色々な男達を自由自在に飄弄する有様を想像」する。女装は最初、郷田にとっ

て他人を欺く快感を与えてくれるものであった。しかしそれは、徐々に男性を自由に翻弄する快感に移行していく。女装をすることで、郷田は意図せず女性の意識を獲得したのである。

ここまで、性のゆらぎをもつ人について分析を進めてきた。しかし浅草では、性のゆらぎをもたぬ人も、新たにゆらぎを発露させることがある。「闇に蠢く^{注6}」の植村喜八は、以前助けた踊子の恋人だと前科者の男に勘違いされ、関係を問い詰められる。

喜八はこの酒臭い四十男から、ふと性的圧迫に似たものを感じた。それが不思議に彼をすくませて了った。

「僕はそんなこと知らないんだよ」

彼は十八の娘の様な答え方をしながら、前科者の引っぱるまに、足を運ぶ外はなかった。

(中略)

「いんにゃ、そうは云わせねえ。おめえは知ってるに相違ねえ」

前科者は段々暗闇の方へ彼を引っぱって行きながら、一つことを繰返した。

「そんなことはないったら」

喜八は、相手の脅迫めいた態度に、案外危険のないことを悟

ると、今度は、どうした訳か、それに一種の甘酸っぱい魅力を感じ出していた。妙な云い方だけれど、幾分は性的な、そして残る幾分は罪の世界の魅力であった。

おわりに

本論ではここまで、一九二五年から一九三一年の乱歩作品における浅草の昼・夕暮れ・夜の特徴を分析してきた。分析結果をまとめると、浅草は変化の場、出会いの場であるといえるだろう。しかし何に変化するのか、そして誰と出会うのかは時間帯によって異なっていた。

威圧的な「四十男」に対し、植村は「十八の娘」のような弱気な態度をとる。また、「前科者の引つづるままに、足を運ぶ外はなかった」という状況から、前科者との力の差も歴然となる。この時点で、植村は前科者の男に対し、力の弱い女性のような立場をとらざるを得ず、彼の性はゆらぎ始める。そして、前科者の男が「暗闇」という周囲から認識されにくい領域に彼を引いて行くことで、植村は「甘酸っぱい魅力」まで感じるようになり、ゆらぎは強まっていく。このように、植村は前科者の男という威圧的で力の強い相手と接することで、新たに性のゆらぎを発露したのだ。

今節では、「寸法師」や「屋根裏の散歩者」から、浅草に性のゆらぐ人々が描かれていること、そして「闇に蠢く」から、浅草は新たに性のゆらぎをもつ人生み出す場でもあったことを示した。浅草はそうやって、人々の性のゆらぎを徐々に増幅させていく場であったのだ。

まず、変化の場という視点から浅草をみる。すると昼は、第一章第一節のような探偵・犯罪者への変化や、第一章第三節のようなその場が人工別世界となるという変化があった。次に夕暮れは、第二章第二節で示したように、人から人でないものへの変化、その場が真の別世界となるという変化がみられた。そして、夜になると第三章第二節で述べたように、性の変化が確認できた。

これらを「人」という観点から比べると、昼は探偵や犯罪者といった肩書き、つまり外面的な部分に変化がみられた一方で、夜は性という内面的な部分に変化があったといえる。また夕暮れは特殊な時間帯であり、人から人でないものへという身体的変化があった。今度は「場所」という観点から比べると、昼の浅草が人工別世界に変化するのに対し、夕暮れは真の別世界への変化があった。夜は、特に場所の変化は見出せなかった。

次に、出会いの場という視点から浅草をみる。すると昼は、浮浪者や失業者を中心として、浅草公園に集う多種多様な人々との出会いがみられた一方、夜は犯罪者との出会いが主に描かれていた。夕暮れは、特に出会いについての描写は見出せなかった。

以上のことから、一九二五年から一九三一年までの乱歩作品における浅草は、昼・夕暮れ・夜とそれぞれの時間帯によって、土地の特性が変わるということがわかった。本論では、既存の研究に「時間」という要素を取り入れることで、乱歩作品における浅草の姿をより多角的に捉えることができたのではないか。

注

- 注1 江戸川乱歩「浅草趣味」「新青年」（一九二六年九月）
注2 高橋康雄「描かれた街角 浅草 乱歩作品を培養する異次元空間」「東京人」（一九九六年九月）
注3 信時哲郎「乱歩の浅草／浅草の乱歩―「押絵と旅する男」論―」「山手国文論叢」（一九九六年五月）
注4 平山雄一『江戸川乱歩小説キーワード辞典』（二〇〇七年 東京書籍）
注5 江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」「新青年」（一九二五年八月）
注6 江戸川乱歩「闇に蠢く」「苦楽」（一九二六年一月～一月連載し中絶）『江戸川乱歩集』（一九二七年結末書下ろし 平凡社）
注7 江戸川乱歩「空気男」「写真報知」（一九二六年一月五日～二月一五

日「二人の探偵小説家」と題して連載し中絶）『江戸川乱歩全集』（一九三二年「空気男」に改題 平凡社）

- 注8 江戸川乱歩「一寸法師」「東京朝日新聞」（一九二六年二月八日～一九二七年二月二〇日連載 朝刊）

- 注9 江戸川乱歩「モノグラム」「新小説」（一九二六年六月）

- 注10 江戸川乱歩「木馬は廻る」「探偵趣味」（一九二六年一〇月）

- 注11 江戸川乱歩「陰獣」「新青年」（一九二八年八月～一〇月連載）

- 注12 江戸川乱歩「押絵と旅する男」「新青年」（一九二九年六月）

- 注13 江戸川乱歩「虫」「改造」（一九二九年九月～一〇月連載）

- 注14 江戸川乱歩「狐奇の果」「文芸倶楽部」（一九三〇年一月～二月連載）

- 注15 江戸川乱歩「盲獣」「朝日」（一九三二年二月～一九三二年三月連載）

- 注16 高橋雄豺「帝都の警備」「日本地理大系 大東京篇」（一九二九年改造社）

- 注17 東京市編『東京市統計年表 第24回』（一九二八年 東京市）

- 注18 E・ゴッフマン著 丸木恵祐 本名信行訳『ゴッフマンの社会学4集まりの構造―新しい日常行動論を求めて』（一九八〇年 誠信書房）

- 注19 石角春之助『浅草裏譚』（一九二七年 文芸市場社）

- 注20 「見逃しならぬ野宿者調べ 失業問題が生み出す深刻極まる現実の証左」「東京朝日新聞」（一九一九年一月一〇日 朝刊）

- 注21 「ペンチで結ばれた四人組の強盗団 最近市の内外を荒し回った兇賊の一味捕わる」「東京朝日新聞」（一九三〇年六月九日 朝刊）

- 注22 石角春之助『浅草経済学』（一九三三年 文人社）

- 注23 添田唾蟬坊『浅草底流記』（一九八二年 刀水書房）
- 注24 細馬宏通『浅草十二階 塔の眺めと〈近代〉のまなざし』（二〇一一年 青土社）
- 注25 助川徳是「江戸川乱歩―「押絵と旅する男」を視座として」『国文学 解釈と鑑賞』（一九七九年九月）
- 注26 吉見俊哉『都市のドラマトウルギー―東京・盛り場の社会史―』（一九八七年 弘文堂）
- 注27 竹内誠『江戸の盛り場・考―浅草・両国の聖と俗』（二〇〇〇年 教育出版）
- 注28 斗鬼正一「都市の境界的空間と文化の革新、創造―浅草の文化人類学的研究―」『江戸川大学紀要』（二〇一三年三月）
- 注29 穴場文野「覗く男、覗かれる女―江戸川乱歩『押絵と旅する男』―」『近代文学 研究と資料』（二〇一四年三月）
- 注30 片岡あい「江戸川乱歩『押絵と旅する男』論―閉じ込められた隙間―」『あいち国文』（二〇一二年九月）
- 注31 「浅草公園内の浮浪者狩り 物すごい前科者 五百六十名を取調ぶ」『東京朝日新聞』（一九二六年八月三二日 夕刊）
- 注32 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』（一九八八年 朝日新聞社）
- 注33 三村徳蔵「新東京陰間団」『犯罪科学』（一九三〇年七月）
- 注34 吹野誠太「大餅と模様餅と縞物に就て」『染織之流行』（一九二九年一月）

（おおかわ かずえ 博士前期課程在籍）